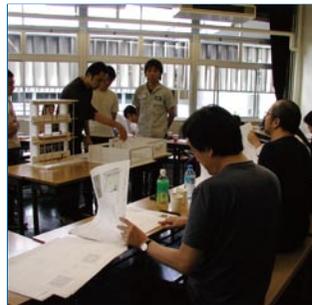
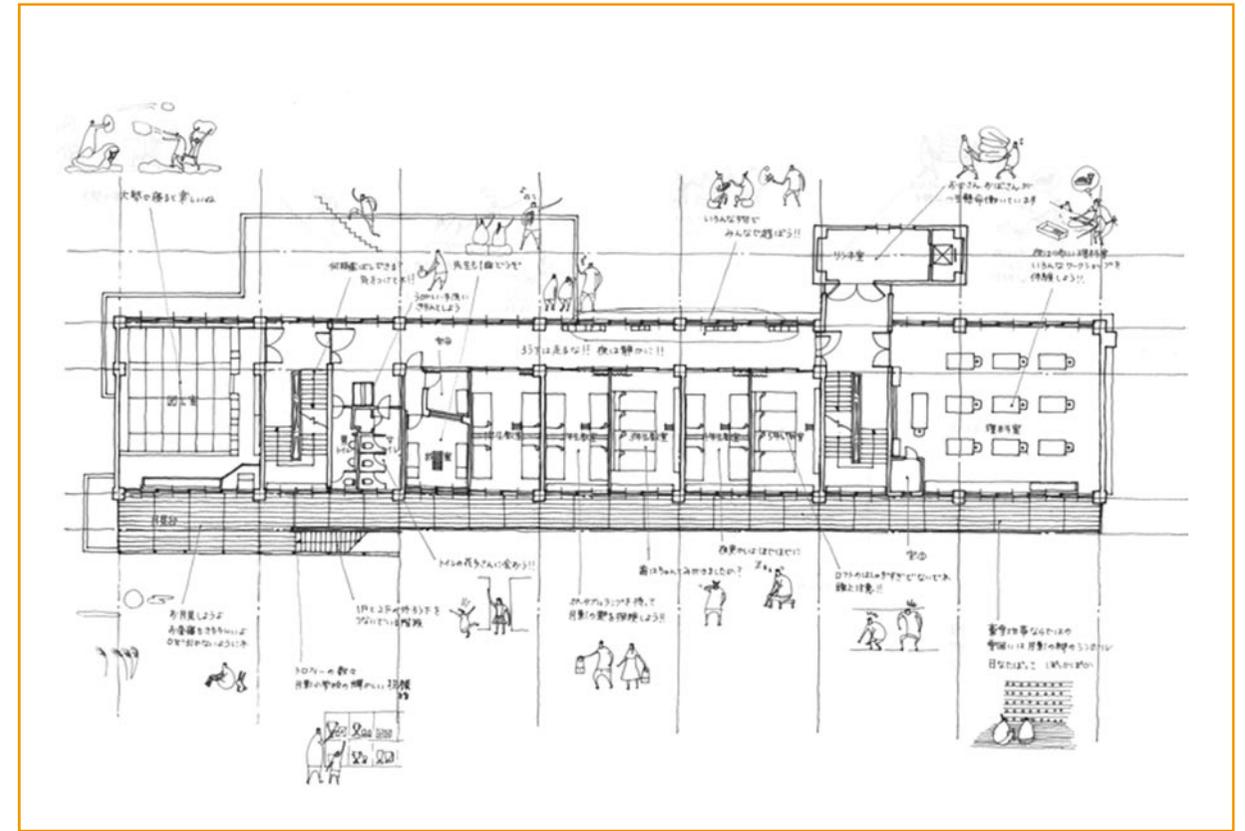




地域の少子化・過疎化により閉校となった、新潟県上越市・月影小学校の再生計画

# 月影の郷

篠原研究室



本プロジェクトの企画、設計は、地元浦川原村（2005年に上越市と合併）と以前から交流のあった法政大学渡辺研究室と、同じく東京周辺の建築意匠系研究室である横浜国立大学北山研究室・早稲田大学古谷研究室・日本女子大学篠原研究室が合同で行っている。2001年に小学校閉校が決定して以来、この4つの研究室は、他学間共同研究プロジェクトとして地元住民とのワークショップを開き、地域の核となってきた小学校をいかに残すか、議論を繰り返してきた。また、竣工を前に小学校が位置する浦川原村は、市町村合併により上越市浦川原区となった。どの地域にも「学校」に対する愛着は存在するが、過疎地域における閉校は、地域の具体的な共有物・交流機会を根本的に失う切実な問題となる。「村」を失ったこの地域にとって、それに代わるものとして、本プロジェクトがあると言える。

- 3年におよぶ基本設計までの学生と地元住民とのワークショップの過程では、アーティスト・イン・レジデンスへの転用なども目論まれていたが、結果的に、農林水産省からの補助金を受け、地元在来のアグリツーリズム（農村田舎体験）を基盤とした、宿泊体験交流施設へと用途転用することになった。
- 今後は、建築系の学生との関わりが深いことから、作品制作や展示の場としての活用、近隣地域で開催される越後妻有アトリエンナーレの関連施設としての活用、また地場農産物の加工センターとしての利用も視野に入れている。そして、本プロジェクトの特筆すべき点である大学院生による設計チームの施設との継続的な関わりは、設計・施工・運営・研究と広範にわたり、施設・事業の独自性と持続性に大いに寄与している。

## サイン計画 2005

竣工後、ソフト面の提案のひとつとしてあらゆるサインを計画。

建物を使う人々が空間を認識し行為を誘発する上で、サインが指し示す効果は大きい。



## 外装計画 2006



「月影の郷」の第一印象を創り出す校舎前面のルーバーのファサード。半期に一度、その姿を変える。

10月頃、ルーバーの数を減らし、ランダムに配置。ルーバーの操作が、人々と共にリズムを生み出す。

この年ゴーヤの縁のファサードが一面を彩った。外装計画当初の目論みでもあったルーバーの穴を活かし駐車している車への視線をうまく遮断。

来期もまた新たな試みを考えている。

浦川原のこども、東京柴又のこどもと一緒に、大きな布をキャンバスにした作品を作った。

宿泊施設として生まれ変わった月影の郷に子供たちが集まることで、もう一度かつての小学校としての姿を取り戻す。

スタンプ作りの材料になるものをこどもと一緒に探す。

かわいい手作りスタンプがいっぱい。



葉っぱ!!



切る!!



スタンプ!!



ちっちゃい手形



かわいいスタンプ



昼間の展示



蓄光中

広い校庭に広げた大きな布がキャンバス。

布いっぱい作ったスタンプを押した。



段ボールを敷く



布を準備



準備OK!!



スタンプを押す!!



いっぱい押せたね



完成!!



光った記念写真

